

広島城内に現存する戦争遺跡に関する研究

広島工業大学	正会員	○大東	延幸
近未来コンクリート研究会	フェロー会員	十河	茂幸
株式会社 フジタ	非会員	東城	雄大
(公財)広島市文化財団広島城	非会員	秋政	久裕

1. 広島城内の防空作戦室について

史跡広島城に戦時中に構築された大日本帝国陸軍の中国軍管区司令部防空作戦室（図1・図2参照）が現存している。この防空作戦指令室は、旧日本軍によって国内の主要都市に整備された施設の一つで、戦時下において空からの敵の来襲に関する情報を収集し、その情報の分析を行い空襲警報などを発令する事などを判断し、その広報する役割を担っていた。昭和20年8月6日の原爆の投下時には、この施設は爆心地から約900mの位置にり被害を受けながらも通信機能を維持することが出来たため、被爆の事実を最初に他都市に通報した施設であるとされている。

構造は鉄筋コンクリート造で、面積約208㎡の半地下式一階建て構造である。



図1 広島城内の防空作戦指令室の内部の様子

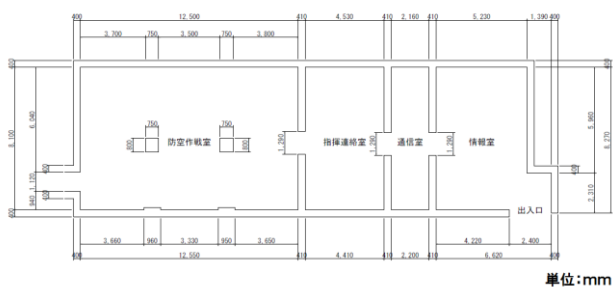


図2 防空作戦指令室の平面図

2. 平成29年度の防空作戦室の調査について

平成29年度もこの施設の調査を（公財）広島市文化財団 広島城と共同で行った。防空作戦指令室の中で、西側の3つの部屋、指揮連絡室・通信室・情報室は、本来のコンクリート床面の上に木の床が張られている（図1参照）。この木の床は、終戦まで防空作戦指令室として使われていた時には無く、戦後、広島護国神社が隣接する場所に移設された際にこの防空作戦指令室跡を倉庫として転用する際に貼られたとも伝えられているが、その由来ははっきりしない。防空作戦指令室の内部の一番東側に位置する防空作戦室にはこのような木の床は貼られておらず、コンクリート製の床にモルタル仕上げである。

この木の床の材質は松であると考えられるが、フローリング床材のように長手方向の断面に片側が凸、反対側が凹となって噛合わせるように敷くようになっていた。この噛み合わせは西側、すなわち指揮連絡室の西側から噛合わせて貼られており、一方からでないと外せず、したがって任意の位置で剥がすことはできなかった。このためこれまで外せたのはこの指揮連絡室の西側の2枚にすぎず、ここからこの下を目視で確認することで、木の床の下が防空作戦室の床面と同じコンクリート製の床にモルタル仕上げであることと、その床面高さが防空作戦室の床面高さと同じであることはわかっていたが、指揮連絡室の本来の床の大半の部分や通信室・情報室の本来の床面の様子は、この木の床を剥がすことができなかったため直接確認ができていなかった。

この木の床も、作られてから50年以上がたっていると考えられ、天井や壁面からの漏水は今のところ確認されていないが、西側の出入り口に近いところは、長年の雨水などの浸み込んでいる箇所があり、木の床の腐食はないが、湿気で膨張し噛み合わせが浮き上がっている箇所もある。平和学習で年間千人以上が見学する場所でもあり危険な状態になったの

で、今回、管理者である広島市によって全面的に貼り換えられる事となった。作業は、平成 29 年 3 月 1 日から 3 月 31 日まで行われた。今回の作業はあくまでも上面の板の取り換えであり、その下の根太や大引はそのまま再利用された。この古い床面の板を剥がしてから新しい床面の板を貼るまでの間に、その下のコンクリート製の床の状態や、その周辺の調査を 3 月 8 日、11 日、13 日に行った。

図 3 に木の床材を剥がした様子を示す。根太は 5 cm 角程度の杉材と考えられ、その下の根太は 15 cm 程度の松丸太と考えられ、同じく 15 センチ程度の束の上に載っており、一般的な木造の床構造であった。

この木の床材を剥がすことによって明らかになった指揮連絡室・通信室・情報室のコンクリート製の床面は、当初の予想通りコンクリート製の床にモルタルで表面を仕上げたものであった。



図 3 指揮連絡室の床の様子

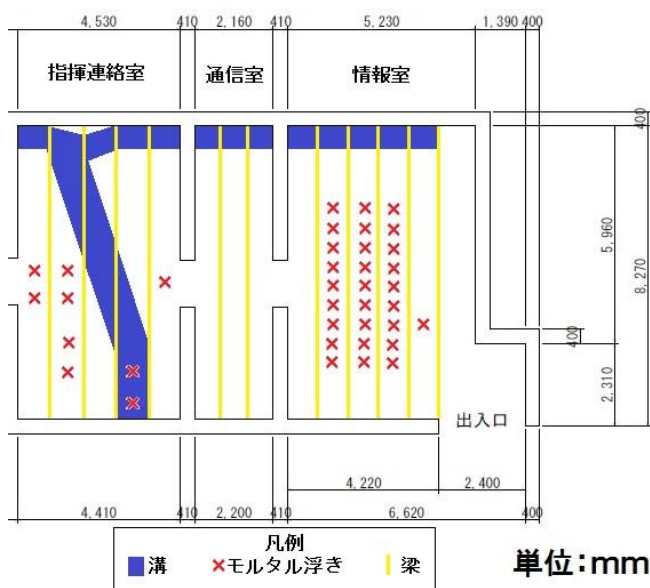


図 4 防空作戦室内の溝の配置図

これら指揮連絡室・通信室・情報室のコンクリート製の床面に対して、打音ハンマーを用いて打音調査を行った。これはこれまでの調査の中に更に地下室があったという証言があり、コンクリート製の床に開口部をふさいだ跡があるかの確認のためである。打音調査の結果からは、モルタルの剥離のある個所は認められたが、床面に特に変化のある個所は確認できなかった。(図 4 参照)

図 3 は指揮連絡室のコンクリート製の床の様子である。一番東側にある防空作戦室の北側には溝があり水が溜まっている。この溝が木の板の下でも北側に沿って存在すると考えられていた。しかし実際には図 3 に示すように指揮連絡室の床面では緩やかにカーブを描く Y 字型になっており、その根元は北側の現在はいれない所の方に向かっていて。またこの溝は水が溜まっていた。これらの溝の配置を図 4 で青色に示す。

防空作戦室の北側の溝は水が溜まっており、排水用の溝だと考えられていた。しかし 1) 流れもない溝に緩やかな Y 型にする必然性があるか。 2) 定常的に水漏れが無い構造物に 40 cm 角程度の断面の排水のための溝の必要性があるか。 3) Y 字型の根元の先には確認はできていないが電気関係の施設があった。 4) この溝の部分には木のようなもので蓋をされ、二か所に金属製の縁のある開口部がある、等から現在水が溜まっているこの溝は電気・通信用のケーブルを収める溝ではないかと推測した。そう考えるとこれまでの証言から得られた、戦時中のこれらの部屋での通信機器などの電気機器の配置ともほぼ整合する。

3. まとめ

これまでの調査研究等から、まだ入れる可能性のある所があると考えられ、昨年度は亀裂を用いた調査で、その空間の存在を確認する事が出来ている。今回の調査での仮定が正しければ、その場所には電気関係の設備があったことになり、今後そこへの調査を目指すこととしている。

謝辞

本稿の調査研究にあたっては、管理者である広島市・公益財団法人広島市みどり生きもの協会殿、調査にご協力いただきました福德技研株式会社殿に謝意を表します。